JF共済
創設70周年記念

創刊号

浜の仲間が
災害の経験を未来に
伝える

命の声

浜の仲間が
未来の災害への備えを
受取る

令和4年3月
全国共済水産業協同組合連合会
（JF共水連）

『命の声』とは……

過去に起こった様々な大規模災害等（地震・津波、台風、海難事故）から、自らの「命を守った」JF組合員等の体験や教訓を『命の声』としてお聞きし、全国のJF組合員や漁村地域で暮らす皆さまに伝える情報誌です。『命の声』は、「声を頂く方」と「声を受取る方」の助け合いです。

災害の経験を伝える

- 東日本大震災
- 地震・火災
- 台風災害・河川氾濫
- 海難事故……

→

未来の災害に備える

- 南海トラフ大地震
- 北日本太平洋沖地震
- 台風災害・河川氾濫
- 海難事故……

目次

『命の声』創刊にあたって

全国共済水産業協同組合連合会
代表理事会長 福原 正純 ……3

監修者プロフィール

尚絅学院大学特任教授 田中 重好 ……3

『命の声』

岩手県漁業協同組合連合会 代表理事会長／岩手・JF宮古 代表理事組合長　大井 誠治さん ……5

岩手・JF重茂 組合員　小成 文博さん ……6

宮城・JFみやぎ七ヶ浜支所 組合員　小野 富美彦さん ……7

宮城・JFみやぎ気仙沼地区支所 組合員　小野寺 捷さん、小野寺 哲男さん ……8

宮城・JFみやぎ矢本支所 支所長　鴇田 勇一さん ……9

福島・JF相馬双葉 相馬原釜地区 組合員　石橋 正裕さん ……10

福島・JF相馬双葉 職員　渡辺 武佳さん ……11

監修者メッセージ ……12

ご注意頂く重大なこと

『命の声』は、全ての災害や事故に共通する災害避難方法ではありません。
「声」を寄せて頂いた方の実際の体験をお伝えする「一つの事例」であることをご理解された上でご自身の判断の参考にしてください。

『命の声』創刊にあたって

全国共済水産業協同組合連合会
代表理事会長 福原（ふくはら） 正純（まさおみ）

JF共済が発足し60年目にあたる2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。未曽有の規模であったこの災害は、多くの尊い人命を奪い沿海地域を壊滅的にしたものでありました。この地震・津波による損害規模は、当初全ての共済金を支払うことが出来るだろうかと懸念されるほどのものであり、JF共済の歴史においても、最も甚大で重大な出来事でした。

2021年創設70年を迎えたJF共済ですが、同時に東日本大震災から10年という節目を迎えます。この70周年を記念し、災害や事故などの体験談を集めた『命の声』を創刊致します。

『命の声』は、震災や自然災害、海難事故など組合員の皆さまが体験された、命を守るための経験に基づく「声」を「漁業者の助け合い」により、全国のJF組合員に「教訓」や「情報」としてお知らせするものです。

「声を頂く皆さま」と「声を受け取る皆さま」の双方が、相互扶助による「思いやりの心」を通じ合わせて頂くよう微力ながら取り組んで参る所存です。『命の声』は今後継続して発行を行い、75周年の節目である2026年を目処に冊子として取りまとめる計画です。

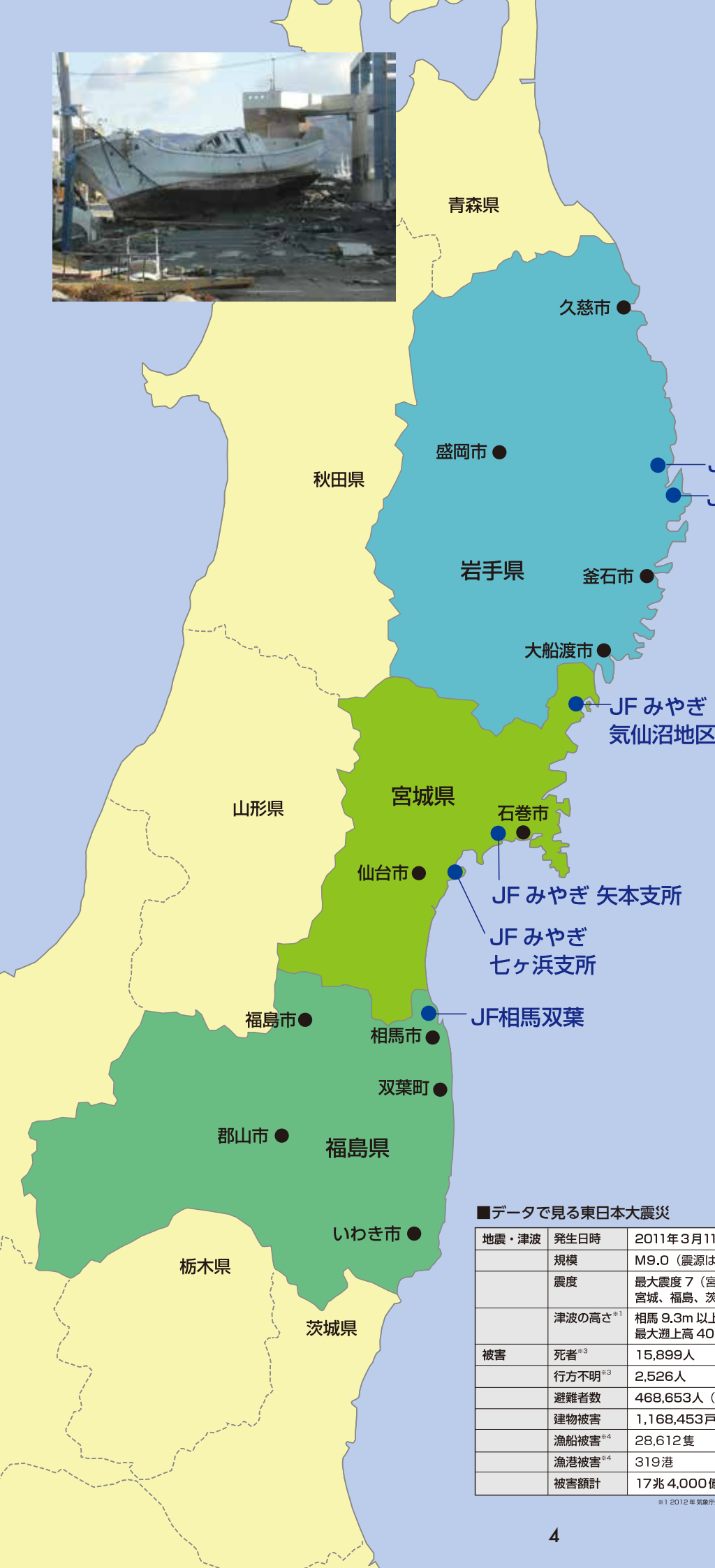
災害の発生を止めることは出来ません。経験に基づくこれらの「声」をお届けすることにより、組合員とご家族の皆さま、漁業従事者や地域の皆さまの「命」が守られることを強く念じています。

監修者プロフィール

尚絅（しょうけい）学院大学特任教授 田中（たなか） 重好（しげよし）

神奈川県生まれ。1974年慶應義塾大学法学部政治学科卒。1993年弘前大学人文学部教授、2001年名古屋大学環境学研究科教授。2017年定年、名誉教授。2007年慶大より博士（社会学）を授与。現在、尚絅学院大学（宮城県名取市）にて特任教授。専門は災害社会学、地域社会学。

主な著書・編書
2006年『超巨大地震がやってきた　スマトラ地震津波に学べ』（時事通信社）
2013年『東日本大震災と社会学』（ミネルヴァ書房）
2013年『大津波を生き抜く スマトラ地震津波の体験に学ぶ』（明石書店）
2019年『防災と支援』（有斐閣）など



■データで見る東日本大震災

2012年3月11日　読売新聞

地震・津波	発生日時	2011年3月11日午後2時46分
	規模	M9.0（震源は宮城県男鹿半島の東南東約130kmの三陸沖）
	震度	最大震度7（宮城県栗原市） 宮城、福島、茨城、栃木の4県34市町で震度6強
	津波の高さ※1	相馬 9.3m 以上　石巻市鮎川 8.6m 以上　宮古 8.5m 以上　大船渡 8.0m 以上 最大遡上高 40.1m※2
被害	死者※3	15,899人
	行方不明※3	2,526人
	避難者数	468,653人（ピーク時の 2011年 3月14日）
	建物被害	1,168,453戸（うち全壊は129,107戸）
	漁船被害※4	28,612隻
	漁港被害※4	319港
	被害額計	17兆4,000億円（阪神大震災は9兆6,000億円）

※1 2012年 気象庁発表　※2 東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループ調べ　※3 2021年3月10日 警察庁発表　※4 参議院事務局企画調整室

命の声 2011年 東日本大震災

「てんでんこ」

岩手県漁業協同組合連合会 代表理事会長
JF宮古（みやこ） 代表理事組合長
大井（おおい） 誠治（せいじ）さん
岩手県宮古市

「てんでんこ」は、岩手県三陸沖で明治29年、昭和8年に発生した津波災害に対し、当時から現代まで被災地で言い伝えられている教えであり、私からはこの言葉を『命の声』としてご紹介します。

この言葉は、津波の時には**「てんでに」（それぞれで）**避難しなさいという意味であり、**自分の命は自分で守ること**を厳しく教えています。

また、この教えは、地元漁業者全員が集団で同じように同じ場所に避難し、万が一その全員が呑み込まれることを防いでいる言葉でもあり、**「てんでに」（様々な方向に）**逃げることで誰かが生き残り、漁業や地域の暮らしを再興してくれるようにという思いがあるのです。東日本大震災においても、この教えにより多くの命が助かりました。しかしながら、逃げ遅れた方がいないかと迎えに戻った方々が流されてしまうこともあったのです。

被災地の一つである釜石市の『**釜石市民より「未来のあなたへ」 10のメッセージ**』を以下にご紹介します。

①**大きな揺れや長い揺れを感じたら、あなたは、とにかく高いところへ逃げてください。**
②**たとえ過去の津波が、いま、あなたのいる場所まで来たことがなくても、あなたは逃げてください。**
③**100回逃げて、100回来なくても、101回目も必ず逃げてください。**
④**あなたが率先して逃げれば、多くの人の避難を促し、命を救うことになるでしょう。**
⑤**相手は自然。いつ、どこまでどれほど大きな津波が来るかはだれにもわからないのです。**
⑥**家族を信じて、みなが「命てんでんこ」で逃げてください。自分の命は自分で守るしかないのです。**
⑦**地震がおきたら、家族が別々の場所にいても探したり戻ってはいけません。**
⑧**もし、大切な人の命を守れなくても決して自分を責めないでください。**
⑨**やがて平穏な日常が戻ったとき、あなたはきっと気づくでしょう。自分が決して一人ではないことを、多くの人に支えられて生きていることを。**
⑩**未来のだれかが同じ思いをしないように、いま、あなたができること「避難を続けること」「備えること」「語り継ぐこと」。**

＜全国のJF組合員の皆さまへ＞

東日本大震災では、全国の組合員また漁業関係者の皆さまに大変お世話になり衷心より感謝申し上げます。『この声』が恩返しのひとつになればと心より願っています。

命の声 2011年 東日本大震災

「立ち止まってはいけない」

岩手・JF重茂（おもえ）組合員
小成（こなり） 文博（ふみひろ）さん
岩手県宮古市

地震が起きた時、私は陸地から２００m程の沖合で養殖わかめの作業をしていました。突然、海面全体がバチャバチャと「バケツを廻りから叩いたように」波立ったので、地震だと分かりましたが、緊急地震速報が沖にも届いていたものの避難を終えるまで、確認が出来ませんでした。リアス式海岸の絶壁では落石などもありモウモウと水煙が上がり、近くの海岸には全く近づくことができませんでした。

私の漁船は養殖わかめやこんぶを載せる、約1.8ｔの船外機船です。幸い近くで操業していた２隻の船と合流し、漁港を目指しました。漁港に到着後、大切な漁船を守りたいという気持ちから、岸壁で丁寧にモヤイ（綱）を結んでいたところ、消防副団長でもある仲間の一人が**「何やってる！そんな場合じゃねー、早く上がれ」**と叫び、そのままにして走ったことで命が助かったと思っています。

自宅近くに着いたとき、第２波が絶壁にぶつかる「ドーン」という大きな音が響いたのを覚えています。

私は幸いなことに家族全員が無事でしたが、津波が見えるまで港にいた友人たちは津波に流されました。また、近隣に住んでいた老夫婦が一度安全な場所に逃げたにも関わらず、大切なものを忘れたことに気づいて家に戻り被災しました。大きな漁船の漁師たちの中には、「船を守る」ため、地震後に漁船に乗り沖に出た人も多くいました。

私の『命の声』は、**立ち止まってはいけないということであり、海から陸地に逃げてきたのなら高台まで一気に走る。もし時間的な猶予が有るならば、漁船で安全な水深の沖まで逃げ、決して戻らない**ということです。

絶対に立ち止まってはいけません。そして、決して戻らないでください。

私の地域では、県が津波シミュレーションを作成し、避難の方法を示しています。震源からの距離、揺れの大きさ、波の高さや速度、そして**「水深」**が大きく関係しており、全国の海に単純に当てはめられるものではありませんが、避難についてはJFからも繰り返し指導が行われています。

沖に逃げた漁船は２～３日の間、沖に留まるしかなかったと聞いています。津波はその時だけでなく、しばらくの間水位を上げてしまい、海上には瓦礫などが散乱し港が使えない状況になってしまったのです。

私の船はブリッジのない小型船外機船で多くの荷物を積むことはできませんが、大震災後、沖に避難する場合のことを考え、食料や防寒着・燃油等、必要最低限の予備と、**「飲料水」**だけは非常用として必ず積んでいます。

命の声 2011年 東日本大震災

「津波は垂直に登れ」

宮城・JFみやぎ七ヶ浜支所 組合員
小野 富美彦さん
宮城県宮城郡七ヶ浜町

震災は停泊させていた漁船（12ｔ）の前で作業をしていたときに、起こりました。突き上げる揺れの中、大急ぎで陸地を走って逃げました。途中、地割れが発生していたのを記憶しています。地震速報のあと、大津波警報が発令されたため、船を守るために一度逃げた道を引き返して漁船に乗り込み、沖に出ました。

私の地区の主な漁業はのり養殖であり、3ｔ未満の船外機船が多い地区ではありましたが、私を含め10ｔ前後の大型船で漁船漁業を営んでいた数隻の船は、そのほとんどが沖に向けて走らせていました。このとき、地域に伝わる古い教えに「沖にいくと津波はない」という言葉があり、頭をよぎっていたと思います。

前浜は仙台湾であり、北部には桂島などの有人島や、さらに北の松島湾は、沢山の無人島が点在する浅い海域となっています。津波は、水深が深ければ波高が低く、水深が浅ければ波高が高くなることから、出来るだけ水深が深い水域を目指して東側（太平洋）に向かいました。

第１波は、**レーダーにしっかりと映っていた**ため、接近する速さも判りました。近づいてくるとまるで壁のように押し寄せてきます。**操船は、波に対して直角に波の頂きに向けて真っすぐ、波の頂きに到達するときには、空を向いている船首を出来るだけ下に向けなければ、波を超えたときに頂きからの落下の勢いと波との衝突で船が壊れると思い、速度を下げること**が必要でした。

第１波を超えると、第２波では５つの波が連続して襲ってきました。周りに目を向けると、北部の浅い水域に、私が超えた波をはるかに上回る巨大な波が見え、もし、あの海域にいたなら助からなかったと思いました。

沖には、瓦礫が散乱していて帰港できず、船上で２泊し、３日目にようやく陸に帰ることができました。食料は、津波で破壊された工場から流出したカップ麺を幸運にも拾うことができ、水の備えも間に合いました。

私からの『命の声』は、**津波に対して垂直に操船して波を登ること、そして、波の頂きでは速度を下げて、船首をできるだけ下に向けること**です。

また、震災後に改めて調べてみましたが、私が津波を超えた水域の水深は、30～38mでしたが、巨大な波を目視できた北部の水域は、5～10mの水深しかなかったのです。沖に避難し津波に遭遇するときには、**出来るだけ「深い」水域へ全速力で目指すこと**が大切です。

日頃より自分の前浜の地形や水深・海底の形状などを把握し、**海上避難を行う進路**を考えておくべきだと思います。

命の声　2011年 東日本大震災

「空振りでもいいから避難指示に従う」

宮城・JF みやぎ 気仙沼(けせんぬま)地区支所 組合員
小野寺(おのでら) 捷(はやし)さん、小野寺(おのでら) 哲男(てつお)さん
宮城県気仙沼市

小野寺 捷さん

小野寺 哲男さん

当時、私たちは JF みやぎの気仙沼地区支所で、監視船『りあす』に乗って、密漁の巡回監視や通報があったときの出動などを担当していました。密漁者は高速の船で逃走します。そのため、監視船は、スクリュー式ではなくジェット式の機関を装備していました。しかも震災の２年前に新造した7.5ｔの船でした。

大地震が発生したとき、陸上にいた私たちが真っ先に考えたのは監視船を守ることです。すぐに連絡をとり合い、船を沖に出しました。

もともと私たちは遠洋漁業を経験しているベテランの漁師です。操船はもちろん、大きな波への対処の仕方など海に対する知識や経験も豊富でした。さらに、私たちが乗った監視船の馬力が大きかったことも幸いし、大津波を乗り切ることができました。

実は、震災発生の数日前、気仙沼地区で海上避難の訓練がありました。震災発生後、このときの訓練で避難集合場所とした地点に、多くの漁船が集まりました。しかし、この水域は水深８mほどの浅い場所で、津波が非常に高くせりあがった場所であったため、多くの漁船が津波に呑み込まれてしまったのです。一方、私たちが乗った監視船は水深約30mの水域だったこともあり、津波を乗り越えることができました。もし、皆に避難するべき水深の知識があったらと、今さらながら思います。**避難の訓練は、常に慎重に、そして徹底的にやるべき**です。

監視船『りあす』

私たちは、津波を乗り切った後、一晩船で沖に滞在し、翌日、陸へ避難。その後、監視船『りあす』と共に、大島（陸の往来が出来なくなった離島）への救難物資の運搬を長期に渡り行いました。

今でも考えるのは「船を守ること」と「命を守ること」です。

組合員にとって漁船は非常に大切な財産です。命に匹敵するとも言えます。しかし、**津波に呑み込まれたら、命はその瞬間にも無くなってしまいます。船だ、借金だ、その後の生活はどうなるんだと思うかもしれませんが、死んだ瞬間、そんなものは一切関係なくなってしまいます。**私たちも監視船を守るために沖に出ましたが、**一番大切なのは人の命。とにかく人の命が最優先です。**

私たちは『命の声』として、全国の漁業者や浜で暮らす皆様に**「空振りになってもかまわない。とにかく行政が出した避難指示には従え！」**とお伝えしたいと思います。

命の声 2011年 東日本大震災

「地震とともに逃げろ」

宮城・JF みやぎ 矢本(やもと)支所 支所長
鴇田(ときた) 勇一(ゆういち)さん
宮城県東松島市

私は、JFみやぎ矢本支所に勤める職員です。震災の時は４名の職員で支所に勤務していました。矢本支所は、塩竈市の東に位置する東松島市にあり、航空自衛隊の滑走路がある広い平野が広がる平坦な地形です。

私の『命の声』は、**「地震とともに逃げろ」**としました。漁船で沖に避難された漁業者の方の声もあるでしょうが、陸を逃げることに対する声です。

地震は大きな揺れでしたが、職員の全員が無事でした。現金などを金庫に保管し、私以外の職員には避難を指示して直ちに帰しました。支所の目の前にあった防潮ゲートを組合員の方と一緒に閉めていたとき、気仙沼を大津波が襲ったという一報が入り、海をみると既に大きな津波が向かってくるのが見えました。

急いで、１階建てだった事務所に入ったものの津波に襲われ、侵入する海水は次第に水位が上昇していきました。呼吸ができなくなりそうになったところで、窓から外へ出て、たまたま手につかんだ電線をつたい、隣の建物の２階屋根の上に避難しました。津波はあらゆるものを押し流し、どんどん周囲を呑み込み、周りの全てが海になっていきました。

押し寄せる波と引き波を４・５回繰り返していたと思います。漁船やパルプ工場から流れてきたと思われる丸太やコンテナなど考えられない大きさのものが、私の周りを海水と共に流れていきました。瓦礫の中から燃えそうなものを拾い、逃げたスペースで火を焚いて、救難の合図にしました。翌日上空にヘリコプターが飛んで来ましたが救助されず、昼過ぎに自力で避難場所を目指しました。

『命の声』を「地震とともに逃げろ」としたのは、**津波の警報や目視を待たずに即「避難行動を行う」という思いから**です。これは、この地区のように**丘陵や高台、起伏の高い土地が全くない平坦な地区で津波に遭遇した場合の『命の声』**であり、漁港近くに居住していた組合員や住民の方々は、地震により電線が切断され防災無線も機能しなかったことで少し遅れて自家用車で避難をしましたが、避難路が自家用車で渋滞してしまったことを教訓とするものです。

避難の目標とした国道までは約２kmありました。歩いても、走っても津波から逃げ切ることは不可能であり、津波は国道を超えさらに奥まで到達したのです。車の中で津波に呑まれた方の多くが犠牲者になりました。**地震に遭遇した場所によっては、一刻も早く行動しなければいけないこと**を知って頂きたいと思います。

私の家族もまた、自家用車で逃げたものの津波に呑まれました。幸運にも近くに流されてきた漁船の上に登って、命が助かったのです。

津波が襲った一帯は、瓦礫はもちろん様々なものや泥などが堆積し、足をとられて移動は非常に難しいです。私は、津波が届かない高い場所に流れ着き、大きな流出物が衝突しなかったことなど、いくつもの偶然が重なり、今生きています。

また、一人屋根の上で孤独になり、見渡す限りの惨劇で絶望した私の気持ちを助けてくれたのは、「トキタさーん」という声掛けでした。近くのやはり屋根の上に避難した方の**「声」が、「励まし」が、生きる希望**をくれました。

命の声 2011年 東日本大震災

「船より命を」

福島・JF 相馬双葉（そうまふたば） 相馬原釜（そうまはらがま）地区 組合員
石橋（いしばし） 正裕（まさひろ）さん
福島県相馬市

大震災の数か月ほど前に、「津波注意報」が発出される地震がありました。予想される津波の高さも低いものではありましたが、皆が漁船に乗り沖に出るという経験をしていました。

地震発生時は、母の実家で延べ縄の縄くくりをしている最中でした。屋内ということもあり、沢山の物が落ちてきましたが、ケガをするようなこともなく、大急ぎで港に向かうべく叔父の車に乗りました。港では叔父の船はあるものの父の船（6.6ｔ）は既に出航していました。叔父の船に乗り、海上で乗り移り父と合流しました。地域の僚船もその後次々と沖に出ました。

遠くに見える津波は黒い壁のように見えながら、船に近づいて来ました。砕けている白波を避け、進行方向を変え乗り切る時は波に対して直角になるよう舵を切りました。陸を襲った津波が戻ってくる返し波は、沖で超えた波の半分を超えるくらいの高さはあったでしょうか。双方に注意が必要でした。

津波警報はラジオで聞き、震源地の方向から来るものと思っていましたが、全く反対に近い南側から襲ってきたことには驚愕しました。

このとき漁船を沖に避難させるということは、数か月前の経験もあったことで、当然のことだと認識されていたと思います。いち早く出船した方は無事であったと思いますが、津波が沿岸に近づいてから出航した方の多くが犠牲になりました。

「津波はここまではこないだろう」とか**「津波を甘く見てしまった」**ためだろうと思いますし、助かった自分も含めこの時はそう考えていたと思います。

家族は無事でしたが、住宅は基礎工事を除いて全てが流されました。

この震災を経験し**「水の強さは恐ろしい」**こと、また**「船より命」**を改めて心に留めています。

家はまた建てれば良いと考えますが、「船」は漁師にとって家族の生活を支え、そして守るための「全て」だと思います。船さえあれば再び稼げるのです。しかしながら「命」を危険にさらしてまで「船」を守るのかと聞かれれば、「命」が先です。結果としてですが、国（行政）や多くの皆さんの支援などで、震災後に再び船を手にすることが出来た方々もいたのですから。

この相馬市にも古い言い伝えがあります。「つのみずはん」という言葉で、津神社までは津波が来ないという教えです。高台にある神社なのですが、震災ではその直前まで波が上がったものの神社は無事でした。

今、私は青年部長をしています。私が、そしてこの震災を経験した我々が、この後の世代にこうした「言い伝え」を教えていく責任があります。『**船より命を**』です。

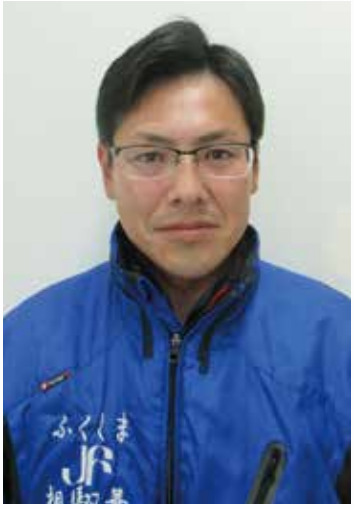
命の声 2011年 東日本大震災

「どう避難するか考えておく」

福島・JF 相馬双葉（そうまふたば） 職員

渡辺（わたなべ） 武佳（たけよし）さん

福島県相馬市



震災時は、JF の職員ではなく、同じ相馬市にある化学プラントの工場に勤めていました。

工場は全ての従業員が３交代の約300名で、その日の出勤者が約100名位働いていたと思います。化学工場ですので地震が発生した直後は、ガス漏れや配管などの点検に加えて、閉じ込められた従業員がいないかなどのチェックが直ちに行われました。

津波警報を受け工場の管理者から、高いところへ避難するよう指示が出され従業員のほとんどは屋上に向かいました。結果としては、この地区の津波は膝上くらいまでであり、工場の敷地内に浸水はあったものの、施設にいれば犠牲者が出る状態ではありませんでした。

従業員には、沿岸に住んでいる方なども多くいて、周囲を見渡せた屋上で、心配した顔で津波の様子を眺めていたひとも多かったです。

津波到達まで時間があったことから、駐車場の車を安全だと思われる西側（山側）に移動することになりましたが、構内ですら一斉に西側を目指したため道路が渋滞を起こしました。

たとえ膝上といっても波が押し寄せる力は強く、乗用車を押し流す勢いは十分にあります。おそらく幹線道路などで数キロ続いた渋滞に巻き込まれた車は、行くも戻るもできなかったと思います。

津波が襲うことなど日ごろから全く考えていなかった方なら、こうした時にどうすれば良いのかは分からなかったでしょう。少なくともこの屋上に留まっていれば無事にいられたこともです。

災害への備えとは、どんな危険が考えられるのか、その場所に居た場合の避難ルートは、そして、どんなものよりも**「命」が優先**であり**「家族や大切な方の安全を確かめる方法」を、予め家族や大切な方と十分に話し合いを行い決めておくこと**が何より必要ではないでしょうか。

私は、この時家族と連絡が取れ、ありがたいことに皆が無事でした。

今私は、JF 相馬双葉の職員になり指導事業を担当しています。

組合員の方々や家族の皆さんのために、また、この冊子を通じて全国の漁村の方々に、**「どこにいたらどう避難するのか」そして、「災害のときにどうやって連絡をとるのか」**を考え相談し、確認しておくことを『命の声』としてお伝えしたいと思います。

監修者メッセージ

昔の古老の言い伝えを現代風に

かつて、どの浜、どの漁港にも、古老からの言い伝えがあった。海の状態、天気の変化予測、台風の備え、地震や津波への対処。現代と違って、科学も未発達で、気象庁もなく、情報伝達手段も限られていた時代、漁業者は、その土地で、古老から伝えられてきた知恵を知らず識らずのうちに学んできた。そのなかの重要なメッセージこそが『命の声』であり、どう命を守るのかという知恵であった。

しかし、漁業の仕方、環境や時代の急激な変化のなかで、そうした『命の声』を伝えるのが難しくなった。たしかに、天気予報や無線が発達し、漁業の機械も格段に進歩したが、一方で『命の声』を伝えることは、個々人に任され、浜や漁港の共通の語りからは消えていった。

そんな状況のなかで、小誌はまさに、かつての古老の言い伝えに代わるものなのではないか。

さらに、今回の特集のように、東北で大津波を経験した人々が語った『命の声』は、四国の浜でも、紀伊半島の漁港でも伝えてゆかなければならない。なぜならば、南海トラフ大地震が心配されているにもかかわらず、過去の津波、昭和20年の東南海地震時津波の経験は大まかにしか伝わっておらず、地震発生時に何をすべきか、何をしてはいけないかの伝承はぼやけてしまっている。

そうした意味では、小誌は、各地の古老が伝えてきた経験や教訓を、遠く離れた浜や漁港に、それを伝える媒体にも成り得る。

この『命の声』をきっかけに、全国の漁業関係者が三陸の地を訪れ、再び現地で、ここに語られていることを聞くことにつながれば、さらに『命の声』は強いメッセージとなるはずである。あるいは、三陸の漁業者が全国から招かれて話をする機会がふえてもいい。そんな交流と学習の機会ができたら、小誌はさらに大きな意味と役割を持つものになる。

命を守るための知恵や経験の語りの交流こそ『命の声』のめざすものだ。

（田中重好）

JF共済創設70周年記念『命の声』創刊号
●発行 全国共済水産業協同組合連合会（JF共水連）
東京都千代田区神田小川町 2-3-6 神田小川町二丁目ビル
TEL.03-3294-9641　http://www.kyosuiren.or.jp/
●監修：田中重好　●編集協力 スタジオミハス

Z000001（R4.3.ミ.3,000）